

教育目標

【自分づくり】社会に目を開き 「なりたい自分」の姿を描き 実現しようとする人

- 自ら考え、表現できる人（創造）
- 仲間とともに高め合える人（共生）
- 心身ともにたくましい人（健康）

学校だより 第15号

ひ ら く

平成28年 9月 8日発行

須賀川市立第三中学校

TEL 73-2377

発行責任者：校長 高崎則行

地区駅伝、男子Aチーム第3位、女子Aチーム第5位



9月1日（木）、鏡石町の鳥見山陸上競技場周辺コースで開催された第49回岩瀬地区中学校駅伝競走大会で、本校男子Aチームが第3位、女子Aチームが第5位の好成績を収めました。

当日は、午前11時の気温が36℃を超える猛暑となり、長距離レースには非常に過酷（めこく）なコンディションとなりました。しかし、さすがに各校とも夏休みの厳しく辛（つら）い練習を乗り切った選手だけに、それを感じさせない気迫の走りを見せてくれました。入賞チームは次のとおりです。

【男子】

第1位	須賀川一中A	1時間01分35秒
第2位	西袋中A	1時間02分35秒
第3位	須賀川三中A	1時間02分49秒
第4位	鏡石中A	1時間03分08秒
第5位	西袋中B	1時間05分10秒
第6位	須賀川二中A	1時間05分23秒

【女子】

第1位	須賀川二中A	44分59秒
第2位	天栄中A	45分15秒
第3位	西袋中	46分55秒
第4位	天栄中B	47分09秒
第5位	須賀川三中A	47分12秒
第6位	仁井田中	48分20秒

なお、本校男子Bチームは第13位、Cチームは第15位、女子Bチームは第13位でした。

壮行会では、昨年度の男子チームが寄せ書きに書いた「速さだけでは勝てない。気持ちの掛け算」という言葉を紹介し、チームとしての自分たちのベストの走りをするよう激励しました。今回は、男女ともに区間賞はありませんでした。絶対的なエースがいない中で、この成績を収めたということは、一人一人の走力とチーム力の成果だと評価しています。それまでの陸上競技の練習に引き続き、6月からは駅伝大会を目標に毎日朝練習を続けてきた本校の選手たちです。練習の量・質ともに地区ナンバーワンだったろうと自負（じぶ）しています。それだけに私も指導者も悔しさは残ります。昨年度東北大会第6位の先輩を目標にしてきた選手たちにも悔しさは残ったようですが、辛い練習に耐え、いい走りをしたという自信と、成績についての無念さが今後の成長には大切なのだと考えています。



出場選手紹介

男子Aチーム	男子Bチーム	男子Cチーム	女子Aチーム	女子Bチーム
1区 須藤 雄哉②	増賀 由輝②	中澤 心斗①	近 奏 愛①	有我 真央③
2区 松井 愛希③	中山 創平②	安田慎太郎①	鈴木 優花②	佐藤 仁美③
3区 大河原勇哉③	橋本 武英①	木賊 呼人②	小林結季加③	西牧 紗来②
4区 武田 匠③	猪狩 颯①	牧野 颯大②	森 英 楓③	森 楓 花②
5区 吉田 真大③	手塚 俊晃①	山内 結稀②	加藤 優花②	増賀 咲紀③
6区 天倉 朋貴③	南條 竜汰②	金谷 大智③		

※ ○に数字は学年。今回は名前の読みがなは省略させていただきます。

防災週間8月30日～9月5日 津波防災の日11月5日

8月30日(火)は、台風10号対策の臨時休業(休校)措置にご理解をたまり、ありがとうございました。

さて、見出しにありますように「防災週間」「津波防災の日」が閣議(かくぎ)決定されました。我が国は、台風、豪雨、豪雪、崖崩れ、土石流、地滑り、地震、津波、火山噴火等による災害が発生しやすい国土であり、近年はひとたび災害が発生すると大きなダメージを残すことが多くなっています。上記期間には、防災・減災に関する啓発(けいはつ)活動が展開されますので、家族の一人一人が情報をしっかり受け止めるようにしましょう。

例えば、下記の内容について、皆さんの家庭ではどうでしょうか。

□防災マップなどを参考に、自宅周辺ではどんな災害が起こりやすいかを知っている。

□最寄りの緊急避難場所の位置と経路を把握している。

□非常用持出品(最低3日分、できれば1週間分)、食料・飲料水の準備をしている。

□家族との安否(あんひ)確認の連絡方法、めいめいに避難した場合の待合せ場所を決めている。

□地域で行われる避難訓練には、家族全員で積極的に参加している。

また、昨年12月に国連総会で11月5日が「世界津波の日」に定められました。津波に関しては、海岸から遠いため強く意識することはないかもしれませんが、海岸部を旅行したり、将来住んだりするようになるかもしれません。津波警報発令時の行動の仕方などはその都度確認するように努めましょう。

「今までこんなふうになったことはなかった。」という地域も、新たな被害に見舞われることもあります。私たち一人一人に高い危機意識が求められています。

その5 生活技術の教育(家庭教育文献紹介「親でなければできない教育」より)

文化水準が高くなればなるほど、生活に関する高度な意識や技術が必要となります。しかし、親がその変化についていくのが容易でないからといって、その教育を学校にオンブしてはなりません。生活に密着した技術は実生活の中で実践することをとおして身に付けるのが効果的だからです。親が中心となって営む家庭生活の中で親子がともに体験することによって地についたものとなり、生きて働く力となります。

生活技術に関する家庭教育を進める場合、重要な課題が3つあります。

第一は、子どもの発達段階に応じて人間としての生活習慣を教えることです。食事、睡眠、排泄(はいせつ)、着脱衣(ちゃくだつ)、清潔、安全に関する基本的な生活習慣にとどまることなく、その先に広がる社会的な自立や共生のために必要な態度、習慣の育成です。

第二には、何世代にもわたって受け継がれ磨かれてきた家族の生活技術の伝統を受け継いでいくこと、そして第三には、それまでの生活になかった文化や技術を取り入れて、それをさらに磨いていくことです。例えば、食生活がそうです。家庭の味、おふくろの味を受け継ぎながら、食材や調理器具の変化に応じてさらに工夫・改善をします。掃除の仕方、暖や涼のとり方など、いろいろと考えられますね。(このくだりを書きながら、私は、子どもが夜中に急に熱を出した時、暑くて寝苦しい時、親がどうしてくれたか、自分たちはどうしたかなど、さまざま思い出しています。)

これらを踏まえて、次の2つは特に重要な実践のポイントです。

一つは、「礼儀作法」です。若い世代の方には、マナーとかエチケットと言った方がピンとくるかもしれませんが、根底に流れるのは人間どうしが社会生活をしていくうえでの、助け合いであり、いたわり合いであり、好意の交換であるという心の持ちようです。(ケータイやネットの普及という今日的な課題も視野に入れて)形式的な指導ではなく、このような心の面も重視したいものです。二つには、「ことばづかい」です。対人関係を抜きにして、いわゆる「よいことば」を使わせることではありません。年配者に対してのことば、友達に対してのことばと、いろいろ使い分けられ使いこなせるだけの敏感さと豊かさは、家庭のことばによってトレーニングできます。大切なのは、表面的な言葉の技術ではなく、相手の気持ちを読むことであり、たとえ親がうまくしゃべれなくても、このことばえ自信を持てればいいのです。

